

ネットボールのゲーム分析

—— 体育の授業で行った場合 ——

神 山 雄 一 郎

The Analysis of Netball Games

—— The Case of a Physical Education Class ——

Yuichiro Kamiyama

はじめに

本学の学生は、ボールゲームを得意とする学生は比較的少なく、かえってボールを怖がってしまう学生も少なくない。ネットボールはこのような学生にボールゲームの楽しさを教えるのに、最もふさわしい教材であると考えている。

ボールが怖いと思っている者に「無理やりボールをさわらせる」ことは、あまり効果的ではない。自ら、「ボールに関わりを持てるのが楽しい」と感じてもらわなければならない。この点、ネットボールは、もし、ボールに触れたくない場合には、まず、あまりボールに触れなくてもすむポジションを選ぶことができる。また、楽しくなれば、自らボールを積極的にさわりに行くか、さわられるポジションを選択することもできる。そして、ボールに関わることが確実にチームのためになると実感した時、更にボールに対して積極的に働きかけることになるであろう。これが役割分担のはっきりしたネットボールの特徴である。

従って、各人がどのくらいボールに触れているかは非常に興味のあるところである。

ネットボールを授業に取り入れて、すでに10年が経過した。この間、ネットボールの紹介²⁾、ポジション別心拍数(授業時)³⁾、教材としての特性⁴⁾と発表してきたが、今回は、個人個人がどの程度ボールに触れているか、他の者との数の違いはどの程度か、それは時間を経るに従ってどのように変化するのかといったことを主眼において調査し、検討を加えた。このような報告は、まだあまり行われておらず、今回初めて、ポジション別の触球数や学生各人のポジションの選択傾向も明らかになった。

方 法

1. 被 験 者

本学の1999年度の体育授業を履修した18名(20歳1名、19歳5名、18歳12名)である。以前にネットボールを経験した者は一人もいない。身体的特性は表1に示した。A・Bグループ分けは、特に意図的な操作はせず名簿順によった。バスケットボール経験者2名(中学時、部に所属)は、共にBグループになった。

2. 調査方法

授業、全てのゲームをビデオに撮り、それを分析した。

授業は、前半チームごとの練習、後半、10分のゲームを2回行った。

表1 被験者の身体的特性

被験者	身長	体重	胸囲	肺活量	背筋力	握力	垂直跳び	立位体前屈	閉眼片足立ち	バーピーテスト	立膝上体起し	12分走
I N	161.5	62.0	92	2950	76.0	26.5	51	20.0	91	10.5	21	2106
O J	155.1	58.5	84	2840	73.5	22.4	35	11.5	39	9.75	14	1655
K Y	151.7	45.0	80	3000	53.5	18.9	34	11.5	90	10.5	18	1696
S H	152.5	43.2	75	2500	49.0	19.2	35	2.0	48	10	19	1846
I S	161.3	77.6	102	3770	77.0	28.1	45	9.0	63	10	19	2178
I A	155.1	50.0	79	3050	57.5	25.4	38	18.0	58	11.5	13	1970
H R	150.5	40.5	76	2860	64.5	16.5	41	15.0	56	11.75	19	2220
I K	165.2	52.8	84	3150	48.0	23.9	46	15.5	58	12	16	1865
O E	157.9	47.4	80	3200	96.5	28.7	46	9.5	120	11.75	16	2052
Aチーム 平均	156.8	53.0	83.6	3035.6	66.2	23.3	41.2	12.4	69.2	10.9	17.2	1954.2
標準偏差	4.76	10.92	8.08	323.90	15.10	4.09	5.73	5.11	24.30	0.83	2.48	191.32

AM	153.0	52.0	84	2750	62.5	22.4	35	20.0	83	9.25	12	1500
OM	150.1	42.0	79	2400	51.0	17.7	38	4.5	35	9.25	16	1998
I R	155.4	49.0	80	2730	59.0	21.6	34	-11.0	40	8.25	5	1562
N I	169.8	94.0	120	3750	70.5	30.8	41	3.0	42	8.25	16	1902
K S	152.2	50.0	82	2410	71.5	24.5	39	9.0	37	11	20	1766
I C	155.0	47.0	83	3180	64.5	22.4	43	7.0	34	8	11	1934
S S	151.8	53.4	82	2810	56.5	17.4	41	18.0	87	9	17	1746
I Y	157.0	57.6	83	3510	43.5	23.0	33	10.0	26	9.5	16	1960
O A	166.0	70.2	97	3010	100.0	29.3	41	8.0	47	9	16	2016
Bチーム 平均	156.7	57.2	87.8	2950.0	64.3	23.2	38.3	7.6	47.9	9.1	14.3	1820.4
標準偏差	6.36	14.98	12.42	436.17	15.15	4.26	3.37	8.48	20.59	0.85	4.14	178.50

授業第1日目は、バスケットボールのゲームを、第2日目は、9人が3人ずつ3グループに分かれ、中、攻、防を順に交代しながら行うネットボール導入のための特別ルールของเกมを行った。第3日目からネットボールのルールで行い、6日間にわたり計12ゲームを行った。

調査を行った期間は1999年10月12日～2000年1月18日である。

結 果

全体を通しての個人別触球数は表2に示した通りである。

全体的にAチームの方が多く、BチームがAチームを上回ったのは、3日目後半と5日目前半の2回のみであった。

ネットボールのルールで始めてから、チームとして触球数が最も少なかったのは、Aチームでは3日目後半の71回、Bチームでは3日目前半の55回であった。最も多かったのは、Aチームでは5日目後半の135回、Bチームでは5日目前半の103回であった。バスケットボールにおける触球数は、ネットボールのゲームでは最低に近い数であった。

個人的に最も多くボールに触れたのは、Aチームでは被験者OEの平均19.4回であり、Bチームでは被験者OAの平均14.6回であった。また、最もボールに触れなかったのは、Aチームでは被験者KYの平均8.3回、Bチームでは被験者IRの平均6.8回であった。このほか、平均で10回に満たなかったのはAチームの被験者SHとBチームの被験者SSであった。

表3は得点である。全体を通しては、Aチームの9勝5敗2引き分け、ネットボールでは7勝4敗1引き分けであった。

図1はシュート数とその成功数(得点)を表したものである。シュート数は折れ線グラフ、その成功数(得点)は棒グラフで表してある。

Aチームがシュート数で勝ったのは6度、Bチームが勝ったのは3度であった。Bチームが勝ったのは、やはりシュート数で勝った時である。シュート数が同じ時が3度あったが、この場合は1勝1敗1引き分けで全くの5分であった。全体を通してのシュートの成功率はBチームの方が高かった。

平均得点(バスケットボールのゲームは除く)は、Aチーム3.9点、Bチーム3.0点であった。ま

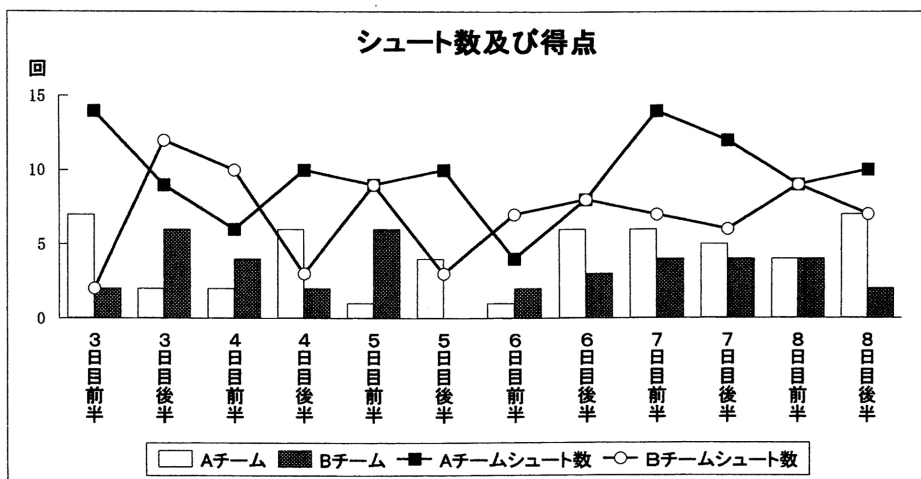


図1 シュート数とその成功数(得点)

表2 両チームの個人別触球数

A チーム個人別触球数

被験者	バスケット前	バスケット後	特別前	特別後	3日前	3日後	4日前	4日後	5日前	5日後	6日前	6日後	7日前	7日後	8日前	8日後	合計	平均
I N	16	9	12	10		15		29		29	14	28	10	31	7	24	209	19.0
O J	16	4	6	6	20	11	18	25	13				7	10	9	6	131	11.9
K Y		8	6	4		6		4	9	9	11	10			15	9	83	8.3
S H	2	14	11	8	3	4	7		8	13	9	18	7	6	16	10	120	9.2
I S		7	6	12	7		10	18	14	16	21	15	19	11		14	163	13.6
I A		21	7	12	17	10	24	10	13	28	20	17	15	14			187	15.6
H R	12		17	8	10	9	27	7					30	2	10	22	142	14.2
I K	4		9	8	9		12		8	12	18	12		25	18	12	143	13.0
O E	21		10	16	19	16	9	29	26	28	20	14	24		22		233	19.4
合計	71	63	84	84	85	71	107	122	91	135	113	114	112	99	97	97	1,411	

B チーム個人別触球数

被験者	バスケット前	バスケット後	特別前	特別後	3日前	3日後	4日前	4日後	5日前	5日後	6日前	6日後	7日前	7日後	8日前	8日後	合計	平均
A M		9	10	9		12		9	17	11	8	7	13	15		11	122	11.1
O M	10		6	5	5	11	17		14	8		17	18	18	6	12	137	11.4
I R	7		5	5	5	5	10	5	10	10	5	5	10	11	6		82	6.8
N I	14	15	11	8	14	12	12	13	18		17	6			8	9	128	11.6
K S	11		5	12	3	15	9	18	11	8	12	18			11	22	132	12.0
I C			8	5			16	8	17	18	12	15	9	9	8	6	131	10.9
S S	9	10	4	7	7	13		9	10		14		13	8		6	91	9.1
I Y		12	12	13	12		17			13	11		9	15	11	12	125	12.5
O A		28	12	12	9	24	19	14	16	16	18	17	9	10	14		190	14.6
合計	51	74	73	76	55	92	100	76	103	84	85	85	81	86	64	78	1,138	

注) * 「バスケット」はバスケットボール、「特別」は特別ルールネットボールのこと

* 右辺の合計と平均は、バスケットを除いたもの

* 空欄は休憩あるいは欠席でゲームにでない

表3 得点結果

被験者	バスケット前	バスケット後	特別前	特別後	3日前	3日後	4日前	4日後	5日前	5日後	6日前	6日後	7日前	7日後	8日前	8日後	合計	平均
A チーム	10	12	2	1	7	2	2	6	1	4	1	6	6	5	4	7	54	3.9
B チーム	0	6	2	2	2	6	4	2	6	0	2	2	4	4	4	2	42	3.0

* 合計と平均は「バスケット」の値は含んでいない

た、最高得点はAチーム7点(3日目前半、8日目後半)、Bチーム6点(3日目後半、5日目前半)であった。

考 察

(1) 触球数と得点について

ネットボールのルールで初めて行った3日目前半の両チーム合わせた触球数は140回(Aチーム85回、Bチーム55回)、同後半は163回(Aチーム71回、Bチーム92回)であった。この回数は、神山⁴⁾が報告した初心者レベルのゲームのパスの数155~187回に近い値である。ただし、この値はパスの数であり、触球数とは多少異なる。パスの値には、ボールをカットした後、コート外に出たものやすぐに他の者にボールが渡ってしまったものは含まれていない。従って、このことを考慮すると、今回の値は幾分少ないと言える。3日目ということでパスが慎重になってきた面と、まだ、思い切ってボールカットに出られないことがその理由として考えられる。

また、今回の両チーム合わせた触球数の最小値は、3日目前半の140回であった。最大値は、5日目後半の219回(Aチーム135回、Bチーム84回)であり、かなり急激に伸びたことが判る。最小値との差は約80回にもなった。そして6日目以降減少傾向となり8日目後半の最後のゲームは175回(Aチーム97回、Bチーム78回)となった。図2のカット数にも表れているが、パスが多くなればカット数も多くなるが、ある程度上手になると、パスも慎重になり、それに伴いカット数も減ってくる。これは最初(3日目)の状況と似ているが、同じではなくパスもカットも1段階レベルアップした状況と考えてよいであろう。

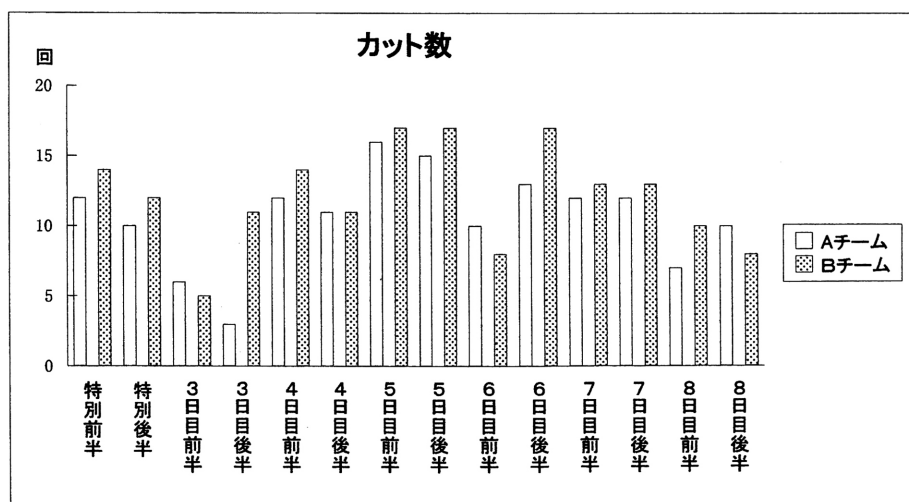


図2 各ゲームにおけるボールカット数

今回の最高得点は7点(バスケットボールは除く)であった。これは神山⁴⁾が報告した、力量差のないゲームの最高得点8点とはほぼ同じである。その報告では、10点以上差が出た場合は、「力量差のあるゲーム」と分類したが、今回はそれに該当するゲームは1回もなかった。

シュート率は、神山⁴⁾の報告によれば、初心者レベル(初めてゲームを行ったもの同士)では、3本に1本、あるいは10本に1本としているが、今回(3日目前半のゲーム)は、Aチームは5割(14の7)Bチームは10割(3の3)と非常に高い割合を示した。今回の場合は、最初といっても、

バスケットボールや特別ゲームを行った後であり、多少トレーニングされたと考えられるが、それを考慮しても高い割合であった。

(2) Aチームの特徴について

このチームは、バスケットボール経験者は一人もいなかったが、最初のバスケットボールのゲームでもBチームに勝ち、身体的特性の中の運動能力でもBチームより高い平均値を示した。

バスケットボールでは、前半、被験者SHはボールに触れた数2回、被験者IKは4回しか触れられず、後半では被験者OJはやはり4回しかボールに触れなかった。これに対し、被験者OE(前半)、IS(後半)は、それぞれ21回ずつボールに触れ、めざましい活躍をした。しかし、全体的にパスはあまり使われず、個人的にボールを運ぶことが多かったため、パスの数は前半71回、後半63回にとどまった。

しかし、ネットボールになると3日目の後半、5日目の前半を除き、Bチームより圧倒的に触球数で上回った。それがシュート数につながり、ネットボールにおいても勝ち越す原因となった。

図3は、各人のポジション別出場回数をパーセントで表したものである。

「アタック」はGSとGAを表しシュートができるポジション、「ディフェンス」はGKとGDを表しゴール下でシュートを防ぐことができるポジションである。WAは、攻撃側であるがシュートをする事ができず、Cは攻防どちらにも参加でき、中央でパスをつなぐ中心であり、WDは防御側であるがゴール下まで行くことはできない。このため、この3ポジションはまとめず、そのまま表記した。

この出場回数を見ると、被験者OJは半分以上(9回中6回)アタック(シューター)を、被験者SHは、やはり半分以上(11回中6回)ディフェンス(ゴール下での守り)を行い、自分の好みのポジションをかなりはっきりさせた。また上記2名の他、アタック(シューター)を1回しかしなかった者2名(被験者KY、HR)、ディフェンス(ゴール下での守り)を1回しかしなかった者が1名(被験者OE)おり、この3名は、自分があまり好まないポジションをはっきりさせたといえる。

5つのポジション全てを経験したのは、被験者ISとIAの2人のみであった。本来なら、全てのポジションを経験することが望ましいが、自分たちの好みで選んだ結果であり、やむを得ないであろう。ただし、両チームを通してアタックとディフェンスのポジションを1回もしなかったという者は一人もいなかった。いろいろなポジションをしてみるという経験は、違う立場の人の考えを理解するきっかけとなり、ネットボールの授業では大切な要素として位置づけている。

このチームには、特に上手な選手はいなかったが、それがかえって練習に全員で真剣に取り組む原因となったようである。その結果、チームとしてまとめ、協力体制がとれBチームに勝率で上回ることに繋がったと考えられる。これは最後の2日間の4ゲーム、3勝1引き分けという結果が示している。

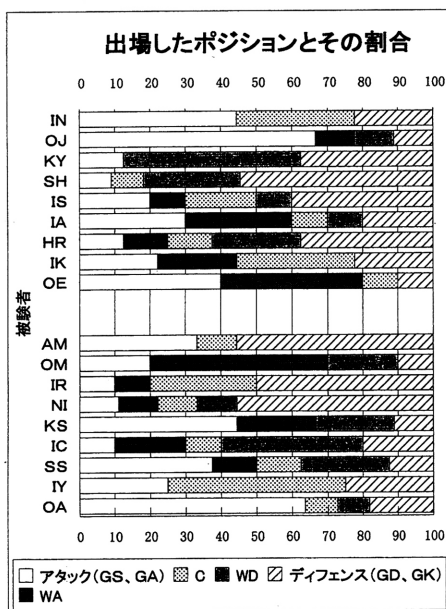


図3 被験者別のゲームに出場したポジションとその割合

(3) Bチームの特徴について

バスケットボール経験者が2名いたが、Aチームに勝ち越すことはできなかった。

最初のバスケットボールのゲーム（前半）では、皆が平均的にボールに触れた（最低、被験者I Rの7回、最高、被験者N Iの14回）が、全体でパスの数51回と少なく、うまくパスをつなぐことができなかった。後半、バスケットボール経験者のO Aが頑張り、全体で74回と相手を上回るパスの数で対抗したが、他の者にシュートさせようと努めたため、得点では及ばなかった。

ネットボールになってからは、この被験者O Aが11回中7回アタック（シューター）を行い、かなり高いシュート率をマークした。しかし、シュート回数が少なくAチームをなかなか上回れなかった（3日目前半では2回シュートして2点、4日目後半では3回シュートして2点、5日目前半では9回シュートして6点をあげた）。

被験者AM（9回中5回）、I R（10回中5回）、N I（9回中5回）は、ディフェンス（ゴール下での守り）を頑張り、被験者OM（10回中7回）、I C（10回中7回）、I Y（8回中4回）は中盤（WA、C、WD）で守りとパスのつなぎに頑張った（図3参照）。

ネットボールでは、自分の役割を理解し、協力体制を作ることがもっとも大切である。チームの中に、役割を理解しない者や、協力体制がとれない者がいるとパスをつなぐことができない。このチームは、バスケットボール経験者という優秀なシューターを持ったため、早くから役割を決めて頑張ったが、他のシューターを育てることはできなかった（5日目後半、6日目前半、8日目後半はバスケット経験者のO Aがアタックのポジションに入らなかったため得点が伸びなかった）。更に、それが他のポジションの立場や考え方を理解できない要因ともなり、結果として、他人に頼るという状態から抜け出せず、協力体制が最後までうまくとれなかったようである。

(4) ポジション別の触球数

図4はポジション別に触球数を表したものである。

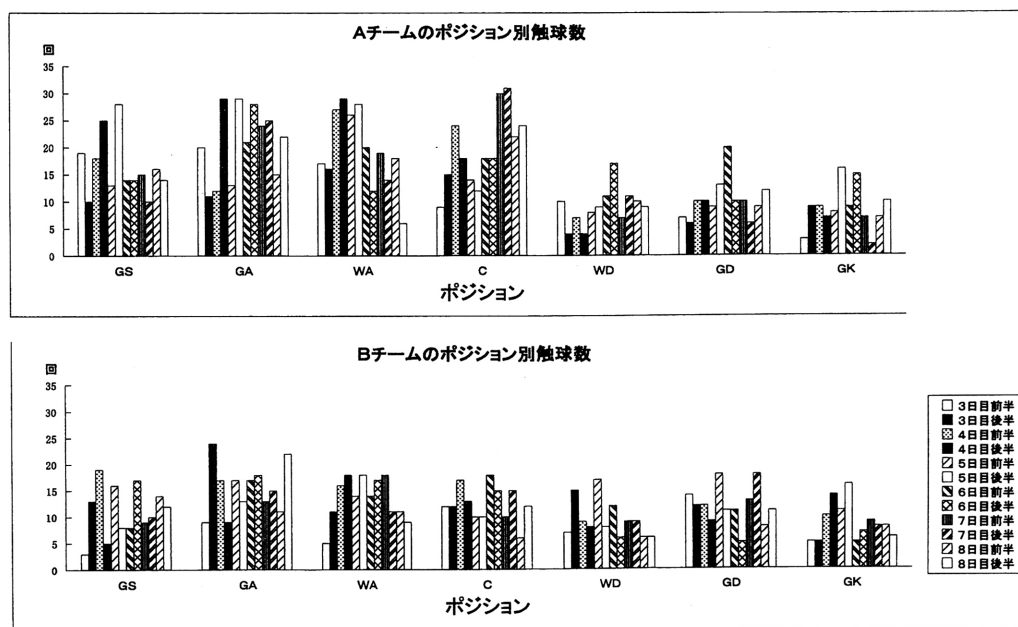


図4 ポジション別触球数

AチームはGA、C、WA、GS、GD、WD、GKの順に触れる回数が少なくなった。一方、BチームはGA、WA、Cの順となり、次にGDが入り、GS、WD、GKとなった。AチームはCも含めた攻撃側が明らかにたくさん触れ、防御側の2倍近くになったのに対し、Bチームは、攻撃側が多い傾向は示したものの、攻撃側と防御側の違いがはっきりとは認められなかった。

全体の数ではAチームの方が圧倒的に多くなったが、防御側（GK、GD、WD）が触れた回数は、Bチームの方が多かった。

ネットボールのゲームでは、Aチームの形を取るのが一般的であると考えられる。それは、ゴール成功後のセンターパスが中央から行われるため、防御側はボールをカットしない限り触れることは難しいためである。従って、センターサードに入れないGKは、当然、カットする場面も少なくなり、ボールに触れる機会が少なくなる。同様に、GD、WDも役割を理解し、守りを固めればボールに触れる機会は少なくなる。

このBチームの形は、攻撃側がうまくボールをつなげず、防御側のカットが非常に多かった場合に起こると考えられる。今回のBチームは、まさにこの場合であり、カット数は図2に示した通り、ほとんどのゲームでBチームが上回っている。しかし、CとWA、特にCの触球数が非常に少ないように思える。もし、Cが動けない場合には、それをWAがカバーするように動かなければならない。ここでも協力体制が必要である。すなわち、中盤から敵陣ゴールへパスをつなぐ役目であるCとWAの認識が少なく、役目を果たせなかったということであろう。ここでボールをつなげない場合は、GA、GSの触球数が少なくなるのは当然といえる。これは今後、指導をしていく上で気を付けねばならないことである。

また、このチームは3日目後半、5日目前半には圧倒的得点差でAチームに勝利している。従って、ポジションの配置さえ考えれば、勝利することは十分可能であったはずである。実力的には両チームの差はほとんどなかったが、ネットボールへの理解がほんの少しAチームの方が勝ったと考えてよいであろう。

(5) 個人別に見た触球数

図5は個人別に触球数を表したものである。ゲームに出場してボールに1度も触れなかったという者は皆無であり、数値の記入がないのは休憩あるいは欠席の時である。

A・Bグループとも、大半の者が5日目以降に最高値を示し、授業が進むに連れボールに触れる回数が多くなる傾向を示した。

Aチームの被験者KY（チームの中では最もボールに触れる回数が少なかった）は、4日目までは6回が最高であったが、5日目以降、最低でも9回触れるようになり、積極的になった様子が伺える。これにより5日目以降は、1回のゲームの中で、触球数5回未満という者は皆無となった。授業の後半では、ディフェンスもパスもうまくなり、不得意な者にとってボールに触れることは、より難しくなるはずである。それでもなおボールに触れる数が増えたということは、全員がより積極的にボールに触れようとしていることを示している。バスケットボールの授業では、この逆の現象が起こることが指摘されている。^{1) 5) 6)}

Bチームの被験者IRは、少ない時は5回、多い時でも10回程度であった。これは前後半通して変わらなかった。最初の3ゲームはGKであったが、5日目の後半には初めてCに挑戦している（この時も触球数は10回であった）。後半、GSに挑戦するなど、徐々に意欲的に取り組む態度は見えたがボールに触れる回数を増やすことはできなかった。

Aチームの被験者SHも平均9.2回で10回には届かなかった。被験者SHも最初のポジションはGKであった。次は続けて3ゲームWDをし、またGD、GKをしている。しかし、ボールに触れる

回数は着実に増える傾向を示し、6日目の後半、初めてCに挑戦し18回ボールに触れている。8日目前半には、被験者KYとコンビを組みシューターに挑戦、被験者SHが3点、被験者KYは1点で計4点を上げている。この時は引き分けであった。

1回のゲームの中で5回しかさわれないという見方もあるが、ネットボールではポジションにより、ボールに触れる数に差ができるのは仕方がないようである。しかし、ボールゲームが不得意な者にとっては、かえってそのようなポジションがあることが楽な気持ちで取り組めるきっかけになると言える。初期には、あまりボールに触れなくてもすむポジションで楽しみを見つけ、徐々にたくさんボールに触れるポジション、あるいは、してみたいポジションに挑戦していくというのが無理のない形であろう。今回のAチームの被験者KY、SH、Bチームの被験者NI、ICは、まさにこの形であったようである。Aチームの2人については既に述べたが、Bチームの被験者NIは6日目の前半にシューターとなり、2対1で勝ち、被験者ICは7日目の前半にシューターとなり惜しくも6対4で破れたが、この4点は全て自分で入れたものである。ただ4人とも、シューターになったのはこの時が最初で最後であった。

今回も全員がシューターに挑戦し、得点を上げた。高校時代までのバスケットボールの授業で一度もシュートを成功させたことのない者にとっては最高の感激であったようである。

被験者NIやICは授業前半に比べ後半触球数が少なくなった。しかし、触球数と運動量あるいは頑張り度は必ずしも一致しない。特にディフェンスの場合、カットすることも立派なプレイであるが、ボールを持たせないようにしっかりマークするというのも立派なプレイである。ネットボールはマンツーマン・ディフェンスが基本であり、しっかりマークされている場合には、そのプレイヤーにパスができず他の者にパスをすることになる。この場合には、攻撃側、防御側ともボールに触れる機会を失う。被験者NIとICは、ほとんど防御側でプレイしており、まさにこれに該当すると考えられる。従って、ボールに触れる機会が少ないからといって頑張っていないかったということは決して言えない。かえって、ボールには触れていなくても非常に頑張っている場合は多々見

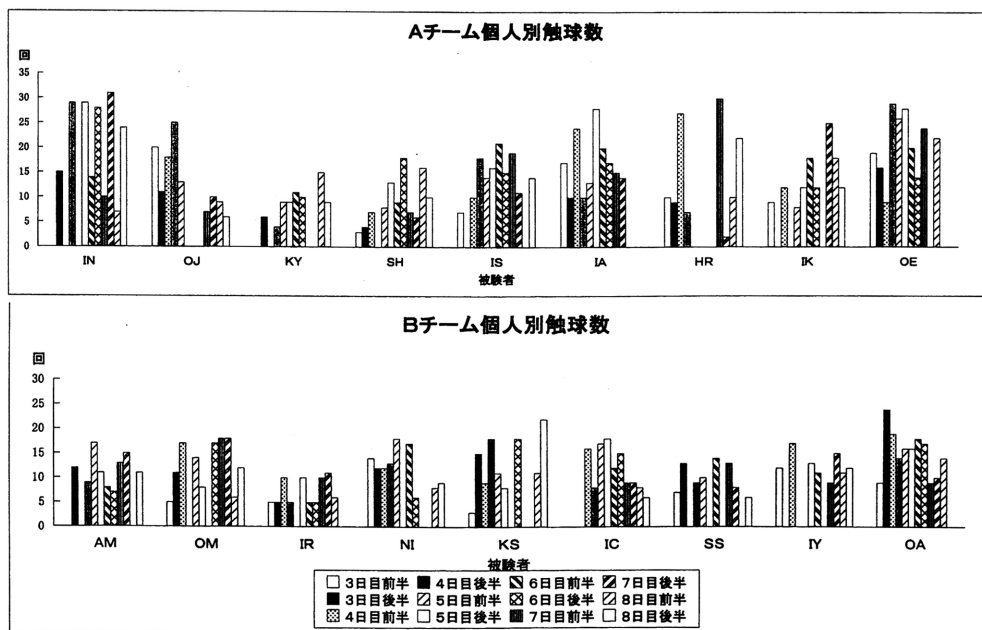


図5 被験者別触球数

受けられる。神山の報告³⁾でも最も心拍数が高かったポジションはGAとGDであり、つぎはCであった。これは触球数の順とは一致しない。ネットボールの楽しみは、ボールにたくさん触れられることのみではなく、自分のマークする相手にボールを触れさせなかったということもあるように思われる。

(6) バスケットボールとの比較

バスケットボールとネットボールの違いは、ドリブルの有無、プレイヤーの動ける範囲の有無、ボール保持者に対する働きかけの可否等たくさんあるが、基本的には、ボールを相手ゴールへ運び、シュートし得点するという点では共通している。

バスケットボールは、中学、高校でほとんどの者がルール等の学習は済ませている。しかし、その激しさから、それを好む者と、怖いと感じる者に別れてしまう。本学に入学する学生の中には後者に属する者が相当数含まれている。彼らは決してボールゲーム自体が嫌いなのではない。ボールをうまくコントロールできないために遠慮がちになり、それが積み重なり、他の者のスピードや強さについていけなくなっているのである。

今回、最初にバスケットボールのゲームを行ったが、やはり、ボールに対して積極的な者と消極的な者に別れた。これは触球数に現れている。

しかも、今回のゲームはとてもバスケットボールと言えるものではなかった。最初の授業であり、他の者の実力が判らない状態でのゲームであったため、やむを得ない面もあるが、きちんとディフェンスをする者は皆無であり、攻撃はまりつきの延長のようなドリブルをし、ゴール下まで行ったらボールを放り投げるといった状態であった。とりあえず、今回ビデオ撮りし触球数は出したが、これがバスケットボールの結果とは言い難いと思われる。もし、半年間、バスケットボールの授業を続けたならば、かなり違った結果となることであろう。

ただ、ドリブルを禁じパスのみで行われるネットボールにおいても、パスの数自体はそれ程増えるわけではなく、チーム別に見た場合には、かえって少なくなる場合もあることが、今回の結果から明らかになった。

ま と め

今回、ネットボール未経験者を対象にして行った、ネットボールの授業を半年間ビデオに撮り、それを分析し、個人個人の触球数について検討した。被験者は本学の学生18名である。

授業は、チームを2つに分け、毎回2回ずつ10分ゲームを行った。第1日目はバスケットのゲーム、2日目はネットボール導入のための特別ルール、3日目からネットボールを正規のルールで行った。

その結果、次のようなことが明らかになった。

- 1) 1ゲームの触球数は、Aチームは71~135回、Bチームは64~103回であった。
- 2) 両チームの合計触球数の最多は219回、最少は140回であった。
- 3) 個人の平均触球数は、最も少ない者(IR) 6.8回、最も多い者(OE) 19.4回であった。
- 4) ネットボールのゲーム(10分間)の平均得点はAチーム3.9点、Bチーム3.0点であった。
- 5) できるだけいろいろなポジションをするよう指示したが、半分以上同じポジションをした者が数名いた。これは、バスケット経験者で優秀なシューターがいるBチームの方が多かった。
- 6) ポジション別の触球数はGAが最も多かった。また、Cを含めた攻撃側が防御側に比べ多くの傾向が認められた。

- 7) 全体的には、授業が進むに連れ、積極的にボールに関わるようになり、触球数が増える傾向が認められた。特に、最初G K等のディフェンスを好み触球数が少なかった学生の中に、徐々に増える傾向が認められた者がいた。
- 8) 授業の後半、触球数が増えない学生も認められたが、ディフェンスの上達を考えると、ポジションによっては、その頑張りが触球数に現れない場合があることが確認された。
- 9) バスケットボールとの触球数の比較を試みたが、今回は、あまりはっきりとした違いは認められなかった。

ボールゲームのあまり得意でない学生が、授業の最後の方では見違えるように、ボールに働きかけるようになる。「生まれて初めてシュートを決めた」と感激して報告に来る。このような状況を、何とか具体的な数字で表せないかと試みたのが今回の報告である。しかし、改めてその難しさを痛感させられた。今後もこの思いを伝える努力をしていきたい。

参考文献

- 1) 上條晴夫他, 「体育嫌い」克服の授業論: こんな子にこんな指導を, 授業作りネットワーク, 学事出版, 8-39, (6), 1995.
- 2) 神山雄一郎, ネットボール(女性用バスケットボール) 紹介―バスケットボールとの比較―, 群馬栃木保健体育学研究, 37-42, 1991.
- 3) 神山雄一郎, ネットボールにおけるポジション別心拍数変動: 体育の授業で行った場合, 群馬県立女子大学紀要, 12: 111-120, 1992.
- 4) 神山雄一郎, 飯山陽子, 教示としてのネットボールの特性, 群馬県立女子大学紀要, 18: 143-155, 1997.
- 5) 大橋美勝, 比較ボールゲーム授業学入門, 体育科教育, 11: 22-24, 1983.
- 6) 柴田博, ネットボールの教材化, すぐに使える授業アイデア50, 第2集, 学事出版, 44-45, 1993.